

《論 説》

ローマ帝国北西辺境における軍の補給政策

— 家畜の生産と供給の実態を分析して —

田 中 の え

【要旨】

本稿は、紀元後1世紀のローマ帝国の北西辺境地域に駐屯したローマ軍の補給政策を手がかりに、先行研究では帝国規模の統一的な戦略の有無が論じられてきた「フロンティア」地域の実態を考察するものである。その中でも、食糧や労働力、皮革製品として軍で大量の需要があったと想定され、今日にも動物遺存体として物理的な痕跡を残す家畜の供給や生産に注目する。タキトゥスとウィンドランダ木板文書、動物考古資料の総合的な分析を通じ、北西の辺境地域における家畜供給は、一次史料で多く言及される穀物供給と異なり、駐屯地ごとや軍団ごとなどの小規模で管理され、帝国官僚の介在による帝国中枢からの統一的な方針が示されないことが明らかとなった。こうした家畜供給および生産の担い手として、軍役を務め終えたのちにこの地域への定住を選択した退役兵の存在が鍵を握る。69-70年にバタウィ族反乱が勃発した *Civitas Batavorum* をケーススタディに退役兵の世界を描くことを通じて、辺境世界を、駐屯軍と現地地域社会の需要と供給という実際上の必要性で結びついた世界として提示する。

はじめに

ローマ帝国の北西辺境（フロンティア）の研究は、今日に至るまで、常に同時代的な国家政策や社会的関心と絡まり合いながら展開してきた。特に19世紀以降、欧米各国の研究者は、イギリス領インドの統治政策をローマ帝国の辺境政策になぞらえて捉えたように、自国の帝国主義的戦略をローマ帝国辺境史に投影しながら理解しようとした¹⁾。そうした中で、第2次世界大戦後の1976年に、国際政治学者 Luttwak²⁾ がローマ帝国フロンティアを帝国全体の国家戦略に位置づける解釈を提示し、フロンティアと国家戦略の関連で多くの議論がなされてきた。

1990年代にはヨーロッパの統合とEU成立の潮流の中で、ローマ北西の国境地帯を単なる帝国の戦略的・政治的な意図の集中する防衛線として理解するのではなく、その行政的な機能や流動的な人の動き、構造を明らかにする研究が盛んに行われた。同時期に大きく進展したフロンティア地域のローマ軍要塞における考古学調査を素地に、近年の研究では、一概に戦略的とは言えない、より複雑なフロンティア観を提示する存在としてローマ軍の存在に関心が集まっている。

本稿も、辺境地域がどのような世界であったかを解明するうえで、辺境地域に駐屯するローマ軍を最も重要な要素と捉えている。そのローマ軍が軍事行動を遂行し、安定的な駐屯を維持するうえで不可欠だったのが軍への補給活動である。実際、ローマ軍が補給活動の重要性を確かに認識していたことは、これまでの一次史料に重きを置いた研究から明らかである³⁾。そうした補給活動の重要性に関する研究では、4世紀にウェゲティウスが記した『軍事論』3章3節の「主題の順序に従うと、飼料と穀物の供給について話す必要がある。というのも、戦争よりも窮乏が軍隊を破滅させることが多く、飢えは剣より過酷である」⁴⁾という一節が頻繁に参照される。特に家畜の飼料や穀物などの食糧は重要性が高く、大きな需要を賄うために現地調達必要性があった。ローマの軍事行動は現地の資源を最大限活用することを前提として計画されたとの指摘もある⁵⁾。本稿は、その中でも食糧としてだけでなく、武具やテントなどの皮革製品、農業や運搬の労働力として軍で大量に必要とされ⁶⁾、最重要の軍事物資の一つであったと考えられる、家畜に焦点を当てて検討していく。

家畜は、ローマ帝国時代の補給上の重要性はさることながら、現代においても「骨」という物理的な証拠を残しているおかげで、文献資料での言及が僅かな辺境地域においてローマ軍の痕跡を保存する動物考古資料としても大きな価値がある。動物考古学研究では帝国西方で現在までに60万点もの動物遺存体⁷⁾が発見・調査されており、特に現在のオランダやドイツに位置する、ローマ帝国の低地ゲルマニアの国境地帯で盛んに研究が進められている。動物遺存体を用いた最もオーソドックスな調査方法は、そのサイズを計測することで、この調査によると、鉄器時代以来の小型な特性を持っていた北西辺境の家畜が、軍の駐屯以降ローマの家畜のように大型化するという傾向が明らかである。この現象はローマ軍の駐屯した各地域で見られ、ローマ軍の供給活動が現地の畜産に及ぼした明示的な影響として多数の研究者の間で共有されている⁸⁾。

そこで本稿は、上記の通り、動物考古学研究が盛んに行われ、ローマ帝国が駐屯する以前から家畜が主要な農産物であり、ローマ軍がこれらの資源を補給に有効活用していたと考えられる、ライン川下流の低地ゲルマニア属州の国境地帯を主たる対象とする。この地域は、前58年から前51年にかけてのガリア戦争をきっかけにローマ人の植民活動が進み、1世紀に安定的に軍が駐屯するようになった。この駐屯の過程は、ローマ帝国初代皇帝アウグストゥスの死からネロ帝の死(68年)に渡る55年の治世を記述するタキトゥスの『年代記』でしばしば言及される。また同一著者の『同時代史』でも、この国境地帯に暮らすパタウィ族が69年から70年にかけてローマ支配に対して起こした一連の反乱が詳細に描かれているため、この地域は辺境地域としては例外的に文献資料と照らし合わせて分析することができる。ただし、元老院議員でローマ有数のエリートであるタキトゥスの文献資料は、要塞に駐屯するローマ軍兵士の実態を必ずしも正確に映し出していない恐れがある点には留意する必要がある。そこで、地域は異なるものの、低地ゲルマニアと同様に畜産が盛んに行われ、かつてハドリアヌスの長城近くの辺境の要塞であったブリテン島のウィンドラダ遺跡に

多く残されている木板文書を用い、より実態に即した軍のあり方の解明を試みる。ブリタニアとゲルマニアがローマ軍の到来以降に経験した植物・動物考古学的変化には類似点が多く、辺境研究でしばしば同列に参照される⁹⁾。

したがって、本稿はローマ軍の北西辺境への駐屯が本格化する1世紀を中心に、タキトゥスの文献資料¹⁰⁾やウィンドランダの木板文書¹¹⁾、動物考古資料と組み合わせながら、ローマ軍の必需品である家畜の生産や供給の実態を歴史的文脈に位置づける。そしてその分析を通じて、ローマ軍が軍事行動の遂行に不可欠な供給の確保や維持のためにどのように北西の辺境地域に関わったのか、特に、供給の主体に着目してどのような軍の方針や方策が見られるかを考察し、北西のフロンティア世界を捉え直すことを試みる。

第1章 先行研究の概観と問題の所在

第1節 フロンティアの戦略に関する研究動向

政治的関心の高さゆえに偏見も多いフロンティアに対し、19世紀の地理学者らが、はじめて組織的な理解を試みた。ラッツェルは、地理的に生み出された自然的境界や領域を「中心と周辺」の理論から解明しようとした¹²⁾。センブルは、彼の見解を、環境決定論の性格を強めて継承¹³⁾し、辺境地帯を人種的・政治的境界、すなわち文明の膨張活動と野蛮の衰微が出会う場所と捉えた。一方、フェーヴルは、フロンティアに関する研究において歴史学が軽視される傾向を批判した¹⁴⁾。彼は、自然的国境に依拠する線型的国境概念を否定し、人間が自然に働きかける影響や社会の文化的側面を含めた検討の重要性を主張した。

このような、ある1つの理論の中でフロンティアを捉えようとする研究動向の中で、今日のローマ辺境研究に最も大きな影響を与えているのは、1976年の国際政治学者 Luttwak が発表した著作¹⁵⁾である。これは、東西冷戦や NATO 設立などの不穏な世界情勢の中で形成された、軍事戦略の立場からローマ帝国を捉える見解で、フロンティアは前1世紀のダイナミックなゾーンから、河川や人工的な壁によって2世紀には固定的で視覚的な防衛線へと戦略的に発展したと結論付けた。この見解は、ローマ人が「戦略」や「防衛線」を示す語彙を持たないことから、戦略的な想像力を持っていたとは考えられないと主張した Isaac を筆頭に、多くの研究者から時代錯誤的との批判¹⁶⁾をうけたが、同時に、ローマ帝国は1つの統一的な戦略に沿ってフロンティアを形成したかという問いを俎上に載せた。

Whittaker¹⁷⁾はこうした政治的な側面を強調するこれまでのフロンティア研究に対し、中国学者 Owen Lattimore の農業形態に注目する研究¹⁸⁾に刺激を受け、社会的・経済的な観点からの考察を加えた。その見解は、戦略的・防衛的な線としてではなく、経済的に双方に開かれた流動的なゾーンとしてフロンティアを理解するものであった。このような帝国全体の大きな戦略の中にローマ帝国のフロンティアを位置づける研究から、より実態に立脚した検討が進展する背景には、同時期の考古学研究の発展がある¹⁹⁾。特にウィンドランダ遺跡を筆

頭に、ローマ帝国のフロンティア戦略の「手先」とも言える辺境の駐屯軍への注目、そして軍事供給の在り方の分析を通して、より流動的なフロンティアが存在していた可能性を唱える説がより説得的となっている。

そうした軍事供給の分析では、軍事供給の担い手が誰か、すなわち、その供給主体が国家や軍、兵士個人かどうかが大きな論点である。ウィンドランダ遺跡の分析を通じて、Whittaker は伝統的な軍人や帝国官僚の関与は明白であり、軍事供給が完全に自由な市場競争に委ねられていたわけではないが、個人商人も確かにシステムの一端を担っていたと考える²⁰⁾。Breeze²¹⁾ は軍事供給のアドホックな側面、すなわち長期的な視点を持たない傾向をさらに強調し、軍の物資は兵士個人によって自由市場で調達可能だったとする。

一方で、より国家の関与を強調する研究者の 1 人に Erdkamp²²⁾ がいる。彼は穀物供給のあり方の変遷を碑文史料から分析し、地元の民間人が供給に関与した事例は 2 世紀後半に最も多いこと、すなわち、通常の長距離での穀物供給が滞る冬期陣営や大規模な軍事行動などの時期にのみ個人が関与したことを明らかにした。また、Rodriguez²³⁾ はオリーブ油のアンフォラに残された刻印から、属州間の供給において、国家の監督下で特定の商人だけが特権を得て取引が行われていた可能性を示唆している。

このように、現代の研究では「ローマ当局の 1 つの戦略のもとでそのあり方が決定づけられる辺境地域」を想定する研究よりも、当該地域の個別の事例に着目する研究が一般的である。その中でも、軍事供給の供給主体に関して様々な議論がなされているが、取り上げる史料により見解が異なることから帝国の様々な辺境に汎用性のある見解を導くことが難しくなっている。

第 2 節 動物考古学の研究動向

動物考古学の研究はフロンティア全体に関する研究に比べると歴史はごく浅い。動物遺存体を使った研究が見られるようになるのは、主に 1980 年代以降であり、当時は動物遺存体のサイズや出土動物種の構成からローマ化の程度を検討することが一般的であった。例えば、Lauwerier²⁴⁾ は牛の大型化という現象から、ローマ軍の進出後には栄養状態の改善や大型種の輸入により繁殖習慣がローマ化したことを指摘する。対照的に、Bökönyi²⁵⁾ は帝国域外の家畜が大型化しなかったことに注目し、これが現地民のローマ化に対する心理的抵抗の大きさを反映するものだとして説明した。また、King²⁶⁾ は、ローマ軍団の進出直後に豚の割合が急増する傾向を、牛よりも豚を好むローマ軍団により辺境地域の食文化がローマ化した事例だと分析した。ただ、軍団が駐屯する地域での豚の増加を、辺境地域における食文化のローマ化として理解することに関しては、池口²⁷⁾ をはじめ、批判的な研究もある。

2000 年代になると、動物遺存体のデータ量の増加や生態系の解析能力の向上に伴い、現地社会の生産能力や駐屯軍の需要の大きさを考慮に入れて、フロンティアにおける軍事供給の全体像を解明することが可能になっていく。Kooistra²⁸⁾ は、ライン川下流の地形環境から

現地共同体の供給力を検討した。彼女は、軍団の進出初期の穀物供給は長距離輸送が軸であったが、次第に現地での穀物の余剰生産を拡大させ、漸次的に現地から調達量を増やした、とする。一方で、畜産に関しては現地社会の現地生態系を鑑みて、現地からの調達と長距離輸送を組み合わせざるをえなかったとの見解を示した。ただし、穀物の長距離輸送とは対照的に、畜産の長距離輸送についての文字史料は残されていない²⁹⁾ ため、その見解の歴史学的裏付けは困難を極める。Groot³⁰⁾ は Lauwerier をデータ不足の点から批判し、軍事地域と都市を家畜の消費地域、農村を生産地域として、地域ごとの畜産の比較を通じて各地域を結ぶ供給ネットワークの解明を試みた。彼女の分析によれば、軍の駐屯により、農村では牛と馬の大型化や役畜としての重要性の高まり、特定の動物種の生産への特化といった傾向が見られた。現地の自給自足的な共同体は、生産性の向上に伴い、軍の大きな家畜需要に十分に対応できるようになり、市場志向型の社会へと変革したという。

このように、動物考古学の研究は単なる家畜の大型化とローマ化の議論から、駐屯軍への供給を中心とした北西辺境の地域社会全体における畜産のあり方を解明する発展段階にある。ただし、文献資料と照らし合わせた分析が少なく、歴史学との棲み分けが明確になっていることには留意すべきだろう。

第3節 問題の所在

先行研究を概観すると、ローマ帝国の北西辺境地域では、Luttwak の大戦略的理解への反動として、昨今ではより実態に即した分析が進んでいることが分かる。とはいえ、軍事供給に関する議論では国家の関与を指摘する一方で、個人の役割を重視したアドホックなものと捉える見解もあり、結論を導いていない現状がある。辺境に対する帝国の統一的な戦略を想定することは困難だとしても、軍の活動を支える重要事項として認識されていた補給活動が、その場限りのものだったという見解には疑念を抱かざるを得ない。ただし、帝国からの管理が指摘されるのは穀物やオリーブ油など地中海が主要な生産地域の作物であり、家畜に関しては長距離輸送の文字史料がほとんど残っていないため、その供給が偶発的なものだと結論付けられかねない面が存在するのも確かである。そこで、本稿では、ローマ軍への穀物供給と家畜供給の特性の違いを踏まえたうえで、家畜供給から見えるローマ軍の辺境に対する姿勢や方策を明らかにしたい。

第2章 ローマ軍の家畜供給の特徴 ―穀物供給との比較を通じて―

第1節 帝政初期の穀物供給

古代人にとっての穀物は、現代の石油に匹敵するほどに市民生活の根幹となるものだったとされる。特に、都市ローマと軍隊へは食糧供給長官 *praefectus annonae* の監督下で優先的に供給がなされ、元首政期以降には、軍への供給が指揮官である属州総督の責務により属州

ごとに管理されるなど、要職者の関与する領域であった³¹⁾。そのため、元首政期ローマの穀物供給のメカニズムや制度の発展は、皇帝権の強化や帝国全域への政治的統制など、ローマ帝国の支配の本質との深い関連付けの中で研究されてきた³²⁾。食糧危機とその対応について著名な研究を発表したガーンジィ³³⁾をはじめ、これまでの帝政期に関する諸研究は、その穀物供給の制度的統制の程度や、そこに見られる帝国政策を中心に議論が展開されている。そこには、大きく分けて、穀物供給制度の確かな存在を認め、港湾整備や大規模な市民への配給、価格統制などの側面から国家の介入を積極的に評価する立場をとる研究者と、Cassonのように帝政期における穀物供給制度の存在自体は認めつつも、同時に、供給メカニズムにおける市場を通じた私的な取引や為政者による施与行為といった制度外の諸要素に重きを置く立場がある。日本では、穀物供給制度の成立過程を共和政の権力との関連から遡及的に検討した、宮寄麻子の研究³⁴⁾があり、前22年にアウグストゥスの表明した、皇帝による初めての穀物供給の引き受けを意味する「食糧供給のための配慮 *Cura annonae*」を出発点としている。いずれにせよ、こうした様々な先行研究はローマの穀物供給における政治的な重要性を示している。

タキトゥスの残した記述の多くも、都市ローマにおける穀物供給の重要性を裏付ける。そこには皇帝や総督によって穀物価格の調整³⁵⁾がなされ、そして穀物危機を乗り越えることで市民からの信頼や名声を獲得する（あるいはその獲得を期待する）姿³⁶⁾がうかがえる。また、このような都市への穀物供給は属州からの供給に強く依存していた。

そして、ヘラクレスに誓って、誰も以下のことを問題としない。それはイタリアが海外領の助けを必要としているということ、ローマ市民の生命が毎日不確かな海と天候に左右されているということである。もし将来、属州の豊かな糧食が主人や奴隷、耕地の需要を支えることができなければ、われわれの庭園や別荘が果たしてわれわれを守ってくれるのだろうか。

『年代記』のこの一節³⁷⁾は皇帝ティベリウスが元老院に宛てた書簡の一部である。都市ローマの海外領土への依存状態と、市民生活が不安定な海上輸送に委ねられていることへの皇帝ティベリウスの危機感が顕著である。この食糧危機に対する不安は皇帝だけでなく市民も常に抱いていたことだろう。ある70年に関する記述では、最大の穀物生産地である属州アフリカが帝国から離反するという噂が市民の恐怖をたきつけている³⁸⁾。また、穀物危機の不安を煽ることは厳しい処罰の対象³⁹⁾となり、これらの記録は穀物供給と都市ローマの市民生活がいかに密接に連動していたかを示す。穀物供給は、皇帝を含め、帝国官僚の管理を要するものであり、それだけに彼らの大きな関心の的だったのである。

では軍隊への穀物供給はどうだったのだろうか。『年代記』や『同時代史』は戦役において大規模な穀物の海上輸送が存在した⁴⁰⁾こと、そしてその食糧補給隊の到着は天候に左右

されたこと⁴¹⁾を伝えている。『同時代史』は、70年のバタウィ族の反乱に際し、籠城する軍が食糧供給に振り回される様子を詳細に記録する。長期戦にも耐えうる穀物や必需品の用意がある⁴²⁾状況から、外部からの供給が長期的に滞ったことで、兵士が従来食用ではない荷獣や馬などの役畜を食せざるを得ない過酷な食糧危機に陥った姿⁴³⁾が伝えられている。また、穀物供給が軍事行動の要であったことは、ローマに対して反乱を起こしたウィテッリウス率いるゲルマニア軍団に対する以下の作戦計画からもうかがえる。

供物供給の要であるエジプトと最も豊かな属州の貢税を支配したら、ウィテッリウスの軍隊を給料と食糧の欠乏のために降伏させることができる⁴⁴⁾。

すなわち、ローマ人が戦争戦略の1つとして敵軍への穀物供給の遮断を想定するほどに、その供給は軍にとっての生命線だったと考えられる。

これらのタキトゥスの記録は、軍への穀物供給が戦争の過程を記録する際に言及の欠かせない重要な要素であり、属州が整備されていく時期でさえ外部からの長距離での調達が必要だったことを伝える。考古学者たち⁴⁵⁾も、駐屯軍への供給に関して、西方の辺境に駐屯する軍への現地からの食糧調達は確かに存在しており、1世紀後半から駐屯地域周辺での余剰生産が増加する一方で、温暖な地中海の気候を好む種類の穀物は長距離輸送が続けられていたこと、そして現地の経済的限界からも、穀物供給を現地の市場に完全に依存することは不可能であったとして、タキトゥスの記述を裏付けている。例えば、現在のオランダの国境地帯に位置する駐屯地では、1世紀半ばまではガリアなど属州外の地域からの穀物供給に依存していたが、1世紀後半から末にかけて駐屯地周辺での穀物の余剰生産が拡大した。このことから、駐屯地は現地社会の資源を利用して自力で運営していく方向へ転換していく一方で、地中海地域と比べて寒冷な気候環境で生育が困難な作物は地中海からの長距離での供給が現地生産と並行して行われていたと言えよう。

このように、穀物の長距離供給は都市ローマと辺境地域に駐屯する軍の生命維持装置であり、安定した駐屯が可能になった時期でさえも気候や経済的要因から長距離での輸送の必要があったことから、帝国官僚の関与がその管理には不可欠だったのだろう。

第2節 家畜供給の特殊性

史料での言及が多数ある穀物供給と異なり、家畜供給は、帝国官僚の関与や長距離での調達を示唆するものだけでなく、その供給そのものに言及する史料でさえ数えるほどしか残されていない⁴⁶⁾。これまでの研究で頻繁に参照されてきたのは、タキトゥス『年代記』の以下の一節⁴⁷⁾である。

同じ年、ライン川の向こう側のフリシイ族が平和をかなぐり捨て、それは服従に我慢

できなくなったというより、我々ローマの大きな貪欲さによるものであった。ドゥルススは彼らに貢物を課したが、部族の窮乏のために適度なものであった。すなわち、軍事利用のために牛皮を供出することであり、首位百人隊長のオレンニウスがフリシイ族の統治に任命されるまでは、誰もその強固さや寸法を気に留めなかった。だが彼は、貢納として認められる規範として野牛の皮を選んだ。それは他の部族にさえ困難であり、ゲルマニア族に耐えることはなおさらできなかった。その森林には巨大な野獣が多く棲息しているが、家には小さな家畜を飼っているだけである。そして彼らはまず牛そのものを、次いで畑を、最後には、妻や子供たちを奴隷として引き渡すようになった。

ここでタキトゥスは、28年のライン川以北に住む部族フリシイ族との戦争のきっかけにローマ人の「貪欲さ」を認め、フリシイ族に課された貢納としての牛皮の供出の負担が重すぎたことにあったと明らかにする。首位百人隊長オレンニウスが統治を任されると、かつて支配していたドゥルススの温和な貢納政策から一転、非現実的な程に厳しい基準が設定され、フリシイ族はこれを満たすために財産や家族を売り払うほどの窮状に立たされた。この史料は、留意点はあるものの⁴⁸⁾、家畜の調達に関して様々な情報を伝えている。

それはまず徴発において、ドゥルススとオレンニウスという二人の人物の裁量が大きく影響するということだ。ドゥルススは皇帝の弟で、前12年にフリシイ族を支配下におさめたことで執政官に次ぐ公職の法務官に就いた人物であり、オレンニウスは首位百人隊長⁴⁹⁾という軍団兵の最高位の役職に就く人物である。首位百人隊長は軍団の中では地位が高く敬意を払われる役職だが、ドゥルススは帝国レベルの高級官職であることから、征服時に貢納を課した人物と、そののち部族を統治し、貢納を維持した人物の役職に大きな差があることが分かる。すなわち、征服戦争から時代を経るにつれ、属州や帝国レベルでの統治から、駐屯兵を直接指揮する軍団や駐屯地レベルでの実務的な統治に移行していると考えられるだろう。また、その一人の支配者によって課された貢納は、被支配民の生活の基盤を失わせるほどの服従的な強制力があることもこの記述から明らかである。ただ、反乱を生み出すほどの負担の大きい徴発がどれほど日常的に行われていたのかについては注意が必要であり、この点については後ほど詳しく検討する。

もう一つの重要史料は、ブリテン島のウィンドラダ遺跡で発見された、85年から120年のものと推定される、カンディドゥスとオクタウィウスの軍事物資の供給に関する以下の書簡⁵⁰⁾である。

オクタウィウスから兄弟のカンディドゥスへ、ごきげんよう。

マリヌスから動物由来の素材「皮革など」100ポンド⁵¹⁾を送る。どこから説明しようか。あなたがこのことについて書く頃にも、彼はそのことに言及しないようにしていた。何度も手紙にしたためたように私は約5000⁵²⁾モディウスの穀物を購入したため、現

金が必要だ。あなたが少なくとも 500⁵³⁾ デナリウスほどの現金を送ってくれない限り、私は預金として用意した約 300 デナリウスを失い、辱めを受けるだろう。だから、できるだけ早く現金を送ってくれ。

あなたが[以前手紙に]書いた皮革はカタラクトニウムにある。それらとあなたが書いていた荷車が私に与えられるように口添えしてほしい。そしてその荷車がどうなったか知らせてくれ。道路が悪いことで動物が傷つけられるのを気にしていなければ、私はすでに回収できていただろう。

テルティウスがファタリスから受け取った 8½ デナリウスについて、テルティウスと共に確認してほしい。彼はまだ私の口座に入金していない。私は 170 枚の皮革を完成させ、119 モディウスの脱穀された *bracis* [穀物の種類?] を所有している。脱穀場で穀物の穂を手に入れることができるように、必ず現金を送ってくれ。しかも、持っていた穂はもうすべて脱穀し終わった。

友人フロンティウスの軍隊仲間がここにいた。彼は私に[皮革を]割り当ててほしいと思っており、そうしていれば私に現金を渡す用意ができていた。私は彼に、3月1日までに皮革を渡すと言った。彼は1月13日に来ると決めた。彼は皮革を持っていたので、[約束の日に]現れなかったし、手に入れるために苦勞することもなかった。もし彼が現金を渡していたとしたら、私はそれを渡していただろう。フロンティニウス・ユリウスが、ここで1つ5デナリウスで買った革製品を高値で売りに出しているそう。

スペクタトゥスと…、そしてフィルムスによろしく。ゲルコから何通か手紙を受け取った。それでは。

これまでの調査で、カンディドゥスは駐屯軍への物資分配を命じる百人隊長であることが明らかにされており、オクタウィウスは他の木板文書に記録が残っていないため、兵士ではなく供給に関わる商人や退役兵と想定とされている。退役兵については、ウィンドランダの別の木板文書⁵⁴⁾でも動物の供給に関与していた可能性が示唆されており、軍事供給の担い手として第3章で詳しく取り上げることとする。人が1日당たりに必要とする穀物を1キロ程度と想定すると、ここで取引されている 5000 モディウスの穀物はウィンドランダ遺跡の駐屯兵全員 (500–1000 人規模) を少なくとも 1 か月間養うことのできる量である。また、500 デナリウスという額も、この史料に記録されている穀物や皮革のやり取りが個人的な取引のためではなく、ウィンドランダの駐屯兵への大規模な供給のためのものだったことを示している。すなわち、この木板文書は、大量の皮革の軍事供給において、駐屯兵を取り仕切る立場の兵士と軍に関わりある個人の役割が大きかったことを示している。

また、この木板文書では皮革の供給が穀物と共に言及されており、皮革と穀物の供給が同じ人物によって管理されたこと、すなわち、家畜供給が穀物と同様に重要なものだったこと

がうかがえる。Casson によれば、2 世紀まで⁵⁵⁾ の帝国官僚の関心の所在は、こうした軍の需要と都市ローマの配給を満たすことのみにあり、そのほかの余剰は商人などの個人的な取引に委託していた。しかし、家畜供給は穀物と同様に軍の大きな需要があるにもかかわらず、帝国官僚の関心を示す痕跡も見当たらず、駐屯地における記録も僅かである。また、残存する僅かな証拠も兵士個人の影響力を示唆するものがほとんど⁵⁶⁾ なのだ。

このように、穀物供給との比較から、家畜供給には、穀物供給に見られるような帝国官僚の関与や長距離輸送の記録が確認されないという、性質の違いが明らかになった。また、それは家畜供給に対する帝国の関心の薄さを反映し、辺境への家畜の軍事供給が頻繁に現地市場を利用したアドホックなものであったとする研究の根拠となっている。

しかしながら、こうした家畜供給の特殊性は、その関心の薄さによるものではなく、軍団や駐屯地単位で管理が行われ、穀物供給のような帝国中枢を軸とした統一的な制度を確立していなかったという、単なる供給主体の違いを反映していた蓋然性が高いと思われる。実際、上述の木板文書 (*Tab. Vindol.* 343.) は興味深いことに、駐屯軍への恒常的で大規模な穀物や皮革の供給が、フロンティウスや彼の軍隊仲間などの兵士個人との小規模な取引と同時に進行でなされたことを示している。この穀物が余剰生産の拡大した現地で生産された穀物だと考えると、タキトゥスによって重要性が主張される穀物と皮革の供給の担い手が同一人物であることも納得がいく。

すなわち、重要な軍への家畜や穀物の供給が、個人的な取引と同様にその場限りのものだったのではなく、個人的な取引こそが、個人を担い手としつつも、軍によって管理され、現地社会の資源を活用した供給網を利用して実施されたということである。また、その供給主体が記録に残りにくい、百人隊長をはじめとした駐屯地の兵士個人や、退役兵をはじめとした駐屯地の外にいる民間人だったことこそが、その膨大な需要にもかかわらず記録がわずかしかなかった要因でもあるだろう。ただ、退役兵は軍との強い結びつきがあるとはいえ、あくまでも「個人」であり、一部の先行研究が主張するように、その供給がアドホックで無作為なものだったという印象を与えかねない。そこで、ローマ軍の辺境への関与の方針を明確にするためにも、果たして辺境地域の家畜供給は個人の紐帯に依存するランダムなものだったのか、について議論していく必要がある。

第3節 バタウィ族の反乱と家畜供給

この問いに向き合い、家畜供給の特殊性を裏付ける事例として、バタウィ族の反乱の渦中における家畜供給の実態に注目し、そこにおける軍の方針や方策を解明したい。

バタウィ族の反乱は、69 年から 70 年にかけて、低地ゲルマニアでの帝国の統治のあり方を大きく揺るがした出来事である。この反乱に関するほとんどの文献資料は、タキトゥスの『同時代史』の4章の12 - 37 節、54 - 79 節、5章の14 - 26 節の3か所に依拠している。バタウィ族はローマ帝国の辺境地域の中でも北海に近い、ライン川の下流のナイメーヘンを

中心とした地域に居住していたゲルマン系の部族である。バタウィ族は朝貢を免除され、兵士としての人員と武器のみをローマ帝国に提供していたと考えられている。その兵員としての徴発の負担は非常に重く、バタウィ族の成人男性の半数が徴兵された⁵⁷⁾とされる。以下の一節⁵⁸⁾は、そうした徴募の過酷さが争いの引き金となったことを伝えている。

ウィテッリウスの命によって、バタウィ族の若者が徴募のために召集される。それ自体、本来重い負担であり、徴兵担当の者⁵⁹⁾の貪欲さと放蕩でさらに重荷となっていた。彼らは老人や弱い者たちを探し集め、お金と引き換えに徴募から放免していた。さらに、思春期前の容姿が目を引く者を一そしてうち多くが背の高い少年だったが、凌辱のために連れ去られた。ここから憎悪が生まれ、反乱を企てていた首謀者は、部族民に徴募を拒否するように駆り立てた。

こうしたローマ支配への不満は、当時、ゲルマニア軍団に皇帝として擁立されたウィテッリウスに向かい、バタウィ族の反乱はローマ内戦の一端として激しさを増した。はじめはバタウィ族のみが主体であったこの反乱は、他のゲルマン系やガリア系の部族を糾合しながら、ライン川西岸に位置するいくつもの要塞をその破壊の渦に取り込んだ。これらの要塞の多くは1世紀初頭から半ばにかけて木造で建設されたもので、要塞の外は従軍商人や民間人の住居が発展して町として栄えているところもあったが、そのほとんどは戦禍のなかで破壊された。この反乱は最終的にウェスパシアヌス率いるローマ軍によって鎮圧され、木造要塞は石造に再建された。バタウィ族の反乱の中心地であった現在のナイメーヘンには、より大きな軍団（第10軍団ゲミナ）が駐屯することとなり⁶⁰⁾、ローマ軍による統治体制が再編された。

考古学者のCavalloらは⁶¹⁾こうしたライン川西岸のローマ軍要塞や居住区24か所を、①軍の進出最初期（40年まで）、②軍の駐屯初期からバタウィ族の反乱の時期まで（40年から70年）、③バタウィ族の反乱以降（70年から140年）の3つの時代区分で調査し、植物及び動物考古学的知見から、要塞への食糧供給の在り方を分析した（資料）。これによると、①の時期に、要塞内での動物種の割合はローマ軍の進出初期によく見られる豚の上昇⁶²⁾を示した。それに対し、②と③の時期は、要塞内での動物種の割合が、駐屯地近くの農村でローマ進出以前から見られる動物種の割合と同様であった。すなわち、安定した駐屯の時期には、軍に供給される家畜の多くは地元からもたらされており⁶³⁾、駐屯する地域で元々生産されていた家畜の種類をそのまま軍の供給として利用したのだ。このことは、軍が必要な家畜の種類を現地民⁶⁴⁾に強制的に生産させ、徴発していたとは限らないことを示している。

さらに興味深いのは、この地域の要塞は②と③の時期に、バタウィ族の反乱による要塞の破壊と再建という混乱の時期を経験したにもかかわらず、動物種の割合において家畜供給の在り方に顕著な変化は見られないことである。従来、バタウィ族の現地民や地域の有力者は

その居住地域の駐屯地に補助軍兵士として徴募された⁶⁵⁾が、反乱鎮圧後の70年以降、さらなる反乱を防止するために他地域に移動させられ、代わりにヒスパニアやパンノニアの補助軍がこの地域の要塞に駐屯することとなった。したがって、反乱の前後で供給のあり方に明確な変化が見られないことから、70年には、地元との人的つながりの薄い部隊に要塞の管理が任せられようとも揺らぐことのない確実な供給が確立していたと考えられるのである。辺境地域における家畜供給が、軍団兵や退役兵などの個人を軸として管理されていたことは前節までに説明したとおりだが、家畜供給はそうした人物との個人的な紐帯や親戚関係のみに依存して個別に集められたものではなく、一つの徴発システムとして持続的に機能していたのである。

Groot はさらに70年以降の要塞周辺の農村 Tiel-Passewaaij (ナイメーヘンから西方におよそ30kmに位置)における羊毛需要の高まりに注目する⁶⁶⁾。羊は70年以前から多く生産されていたが、その死亡年齢を特定する調査によると、70年を期に死亡年齢の高齢化が見られる。それは、羊の利用方法が羊乳や肉用から羊毛や役畜へと変化していることを示す。Groot はここから、徴募に応じる代わりに税を免除されていたバタウィ族が、反乱後に免税特権を喪失し、羊毛を軍に納める必要性があったのではないかと考える。この羊毛需要は、ナイメーヘンに駐屯していた第10軍団ゲミナが撤退した2世紀初頭を期に低下している。この軍団の移動と連動した羊毛需要の変動は、Groot の解釈を裏付けるものである。

したがって、バタウィ族の反乱を通じて家畜供給を再検討すると、家畜は地元の資源に頼らざるを得ない軍事物資であり、個人の兵士や退役兵などの個人がその供給の管理や促進の担い手であった。ただ、供給は単なる個人的人間関係に基づいた取引を超えて、要塞の在り方が大きく変わろうとも揺らぐことのない、必要量を軍に供給可能な安定的なネットワークを形成していたことが分かる。すなわち、供給は決してその場しのぎのものではなく、軍の主導権のもとで行われていた。

こうした徴発は、部族の資源を奪うことでその反抗心を削ぐものとして利用された、とこれまでの研究ではしばしば理解されてきた⁶⁷⁾。確かに、バタウィ族の反乱鎮圧後に部族に課されたとされる羊毛の徴発は、秩序回復期の混乱の中で軍の主導権を再び誇示する事例だと言えるだろう。本章第2節で取り上げたフリシイ族の牛皮の貢納に関する事例も同様の文脈に位置づけられ、徴発が有している帝国の統制力を示す側面を否定することはできない。ただし、先述のフリシイ族との戦争も今回のバタウィ族の反乱も、部族に課された重すぎる徴発がその事の発端として記録されており、タキトゥスの史料を辿る限り、ローマ人も常日頃からの強制的な徴発による締め付けは統治を揺るがす危険性をはらむものとして十分に認識していた⁶⁸⁾はずだろう。では、辺境地域で安定的な供給網を構築する軍への日常的な徴発はどれほど過酷なものだったのだろうか。

第4節 徴発の過酷さと軍の主導権

辺境地域に駐屯する軍への家畜や食糧の供給形態には、一般に2つの種類が存在すると考えられている⁶⁹⁾。それは、税としての徴発や強制的な買い上げ、長距離輸送による「政治的」な次元での軍への公式的な供給、そして個人商人による「市場」取引を通じた補足的な供給である。ここでは主に「政治的」次元に注目したい。

軍への公式的な供給においては、徴発が最も一般的な形態として指摘されている⁷⁰⁾。タキトゥスの伝えるフリシイ族の事例は勿論のこと、考古学研究の多くも同様の見解を示す。しかし、先述の木板文書 (*Tab. Vindol.* 343.) では大規模な皮革の取引に現金が用いられている。ウィンドランダ遺跡の木板文書は、駐屯地内の再分配の記録や兵士個人の私的な取引の記録が多く、金銭を用いた取引を示唆する史料がいくつか残されている⁷¹⁾ が、この史料のように大規模かつ公式的で恒常的な軍事供給の際にも金銭が関与していることは注目に値する。この金銭が家畜を生産した現地民の手に渡るものなのか、仲介業者との取引にのみ使われているのかは現時点では明らかではない。そのため、この皮革が強制的な徴発物か、軍の農場で生産されたものか、現地の余剰物として市場で出回っていたものかを特定することは困難である。ただし、この史料は辺境地域の駐屯地の外でも貨幣の利用が我々の想像以上に浸透していたことを示唆し、強制的な徴発で疲弊する辺境地域というイメージを塗り替える可能性を秘めている。

また、徴発を実際に誰が行っていたのかについても議論の余地がある。徴発が軍を中心として行われたものであれば、選りすぐりの家畜を選択することも考えられるが、実際には高齢で小型の利用価値の低い家畜ばかりが駐屯地で見られ、現地民が多く居住する「農村」においてより体格の優れた家畜が残されていた、とする研究がいくつか報告されている⁷²⁾。すなわち、辺境地域の軍は現地社会からの供給の中でより優れた家畜を獲得できた訳ではなかった。軍にとって家畜の質は優先順位が低かったか、あるいは生産者が質の優れた家畜をローマ軍に渡さなかった（あるいは渡す必要がなかった）と考えられる。すなわち、軍に供出する家畜は、軍によってではなく、地元の農業共同体に属する者や生産者本人によって群れの維持にとって最適な選択がなされ、軍への供給において現地民に一定の主体性があったと考えられる。

Groot は発掘調査から「農村」ではローマ軍の駐屯以降、農業居住域の拡大が生じている一方で、大規模な牧場などの劇的な畜産形態の変化は見られず、小規模の農業生産が続けられたとも指摘している⁷³⁾。すなわち、直接的に入植された地域やローマ人の影響下にある地域と比べて、現地民の多い「農村」は従来の農業形態を引き継いだうえで、受け入れ可能な漸次的な変化を取り込んで軍の需要に対応していたのだろう。前述した Cavallo の駐屯地付近で元々生産されていた家畜をそのまま軍の供給物として利用したとの主張もこのことを裏付けている。つまり、供給網は軍の需要ありきではなく、現地社会の供給能力ありきで構築され、それゆえ現地で生産できない作物は地域外から輸入して手に入れる必要があったと

考えられる。穀物や地中海産の作物が、駐屯開始からしばらく経過したのちの時代まで長距離で輸入され続けたのもこのためだろう。

したがって、軍の暴力的な徴発や略奪は一時的かつ例外的なもので、日常的な軍への家畜供給は現地民が持続的に供給可能な範囲に収まる負担であり、彼らもその中で自らの農業を続けていくための最低限の選択をすることができたのである。辺境地域の畜産はこうした軍による徴発を動力として、ローマ軍の需要と現地の供給力の相互作用の中で変容していった。軍は必需品の安定的な供給のために、その徴発を確実に監督し、その過程で退役兵が家畜の供給量の向上に関与することも大いにあっただろう。ただし、軍にとっては軍への確実な供給を達成することが最大の関心事であり、現地へ地域社会にそれ以上の過度な変容を求めるものではなかったのである。

また、すでに示してきたように、ウィンドランダ木板文書の多くは金銭の介在する小規模取引の記録であり、市場売買の痕跡とされている。また、市場を通じた取引の見返りだと考えられているローマの陶片も、辺境地域の農村各地で見つかっている。こうした市場取引の記録は軍への供給がすべて市場で調達可能であり、アドホックなものだとする研究の根拠とされる。しかし、これまでに確認してきた史料の数々は、軍の主体性とともな軍の確実な供給に対する関心を認めており、辺境地域の家畜供給がその場しのぎの曖昧なものだと結論付けるものではない。確かに市場を通じた家畜の取引は存在したが、それは現地民が軍の徴発に対応する中で生産力を徐々に拡大させ、余剰の生産が可能になったことに由来すると考えられる。すなわち、市場に出回っているものは徴発によって軍が確保した分を除いた余剰のものであり、むしろ軍が必需品の確実な調達以上に地域社会を搾取する存在ではなかったことを示す痕跡かもしれない。このことを踏まえると、「穀物供給についての帝国官僚の関心は、都市への配給と軍人の需要を満たすことのみにあり、必要分を除いた残りの余剰は個人に委託されていた」との Casson の指摘は、意外なことに辺境地域の駐屯軍への家畜供給にも当てはまっていると言えるだろう。

以上のことから、家畜供給は穀物供給とは異なる担い手、すなわち軍と関わりのある「個人」によって取り仕切られたこと、そしてそれが軍の管理のもとで確実に実施されるものであったことが明らかになった。また、軍による家畜の徴発は、反乱や戦争後の秩序回復期には現地民に負担としてのしかかることもあったが、日常的な徴発は必需品の確実な供給を目標とした、強制力を伴いつつも現地民の生産力に応じた十分に達成可能なものとして設定されていたのである。そこで、次章では、そうした家畜の現地からの供給を可能とした立役者としてしばしば言及され、駐屯地の外で軍事供給を管理に関与していたと考えられる退役兵を軸に、彼らの生きた世界を描き出したい。

第3章 退役兵の生きる辺境世界

第1節 1世紀の Civitas Batavorum

前章で示した 69-70 年にバタウィ族反乱の勃発した、ローマ軍の到来以前からバタウィ族が居住してきたエリア一帯は、一般に Civitas Batavorum と呼ばれている。退役兵の北西辺境地域での家畜の生産および供給における役割を詳細に検討するにあたって、この章では、1 世紀の Civitas Batavorum を例に、その構造や特徴を捉え、退役兵の生きた辺境世界を描き出すことを試みたい。その際、このエリアにおける家畜供給のネットワークを検討し、北西辺境地域を消費地域と生産地域に分けた Groot⁷⁴⁾ の分類方法を参照する。

まず、消費地域の概観である。Groot は消費地域を駐屯地や要塞などの軍事地区、軍団駐屯地に付随する形で発展した、兵士の家族や関係者などが居住するカナバエ *Canabae* やそのさらに外側に広がる民間人の集落であるウィクス *Vicus* を中心とする都市 / 軍事地区、都市の 3 つに分類した。ローマ軍は前 19 年に Hunerberg に要塞を建設し、前 13 年にアウグストゥスが指揮権を甥のドウルスに委譲すると、4 つの軍団と多数の補助軍部隊がガリア中央からライン川沿いの辺境に配備され、バタウィ族の新しい首都として Oppidum Batavorum が建設された。ただ、この首都は「都市」としての性格を確立する前にバタウィ族の反乱の中で、バタウィ族自らの放火⁷⁵⁾ によって破壊された。その後、バタウィ族の反乱を鎮圧した軍団は Oppidum Batavorum の遺構に要塞を、71 年に駐屯した第 10 軍団ゲミナは Hunerberg の要塞を再建した。バタウィ族の首都および中心的な居住域は、Oppidum Batavorum の 1500m 西方にあった軍団の要塞を発展させる形で建設された。トラヤヌスは後に、その都市にムニキピウムの地位を付与し、Ulpia Noviomagus Batavorum、すなわち「バタウィ族のための新しい市場」を意味する名を与えた。

こうしたローマ進出初期の要塞や Oppidum Batavorum の建設、入植および発展は、強いローマ的な性格のもと実施され、辺境エリアを帝国支配に統合するローマ帝国の方針と深く関連しているとされている⁷⁶⁾。いずれも要塞を中心にカナバエ、ウィクスがといった集落が形成されたが、ローマやガリアなど他の属州出身の退役兵、職人、役人などが居住した。バタウィ族の者など現地民の居住は確認されず、居住地域に棲み分けが存在していたと考えられる。考古調査からウィクスは要塞と比べて女性や子供の痕跡が多く見つかる一方で、その活動が要塞の指揮官の元で管理されていた可能性が指摘⁷⁷⁾ されており、この消費地域は全体として軍の強い影響下にあったとされる。一方で、この地域のカナバエに建設された複合的な施設跡を考古学的分析から家畜市場だと明らかにした Driessen は、Civitas Batavorum の新しい首都に与えられた「新しい市場」という名は、バタウィ族の反乱前の軍団駐屯地周辺のカナバエに存在したかつての市場と区別するための名だと考える⁷⁸⁾。また彼は、カナバエの家畜市場が、家畜の市場取引の他に軍事訓練のために利用され、現地民にとっても繁殖技術や飼育方法を獲得する機会として地元社会の統合の役割を担っていたとする。このこと

から家畜の取引を通じて現地民と要塞周辺に居住する住民に接点が生まれていたと考えられる。

生産地域は Groot に従うと、ローマ支配以前から存在する「農村」地域、ローマ式農場のウィラ *Villa* の 2 つに分類される。「農村」はローマ的な建築様式などが確認されない、バタウィ族が従来から居住してきたエリアである。ウィラは一般にローマ人による農業地域であり、退役兵による馬の生産や軍への供給が指摘されるなど軍や都市の需要と連動した農業が実施されたとされている。この *Civitas Batavorum* でもウィラは 1 世紀以降に確認されるものの比較的希少である。Christensen⁷⁹⁾ はそれらが既存の農場から発展する形で建設されたことから、その所有者がバタウィ族の地元の共同体に属する人物であり、ローマ人の入植地や軍事要塞への供給に関わることで富を蓄積したと考えている。また、彼は「農村」の住居も一部ローマの軍事建築から着想を得たような特徴を有することから、退役兵が住んでいた可能性を示唆する。ここから、「農村」とウィラの生産活動における役割や居住者を厳密に区別することは困難であり、生産地域における退役兵や軍に関連ある人物と、現地民との棲み分けは明確ではなかったのだろう。いずれにせよ、*Civitas Batavorum* はこのような小さな集落のある農村地帯が支配的⁸⁰⁾ であり、こうした地域を中心に軍への補給を目的とした余剰生産が行われていた。

Civitas Batavorum はこうした生産・消費構造に加え、バタウィ族が貢納や納税の義務を免除される代わりに軍役を課されたという点で、人的構成にも特徴がある。1 世紀頃のバタウィ族の人口はおよそ 35000 人と推測され、そのうち常時約 5500 人が（ローマ市民権を有していないために）補助軍として軍役に就いていた⁸¹⁾。一般に兵士は徴兵された後に他地域に派遣されるが、バタウィ族は地元で徴兵され、地元の補助軍の要塞などで軍務に服した。*Civitas Batavorum* では 1 世紀まで帰郷する退役兵はバタウィ族の補助軍に努めた兵士が主だったが、彼らを通じた市民権の浸透とともに、1 世紀末ごろから徐々に他地域からこの地域に派遣された軍団兵も、駐屯したこの地域に退役後に定住するようになった⁸²⁾。ただ、そうした地元出身者と他地域出身者の間で、定住の地として選ぶ場所に異なる特徴があったようである。Nicolay⁸³⁾ は補助軍の兵士が受け取る除隊証明書や碑文などの痕跡から、退役兵の出身とその退役後の生活の特徴を分析した。それによると、他地域から辺境に派遣された兵士は、都市中心部や駐屯地周辺のカナバエやウィクスを除隊後の定住先として好み、農村地域にウィラを建設する者もいた。一方、地元出身の兵士の場合は、都市やカナバエに居住する者もいたが、かなりの数が農村地域に住むことを選んだ。また、除隊後の職に関しても、地元出身者の補助軍退役兵ほど、都市の公職などではなく、軍の需要に対応する商人、農家、職人として仕事に就く傾向もあったようだ。

このような特徴を踏まえると、*Civitas Batavorum* の生産地域と消費地域はローマ帝国の文化圏・経済圏に一樣に取り込まれていなかったことが分かるだろう。実際、Groot⁸⁴⁾ は軍の進出初期には、独自の供給ルートでもたらされた、豚や鶏の割合が高くなる傾向がこの一

帯でみられたが、「農村」は例外的にローマ軍の到来以前からの家畜割合が維持されたと主張する。加えて、2世紀以降「農村」でも、大きな軍の需要に対応するために、特定の動物種を集中的に生産することや家畜の役畜としての利用の増加、耕作地の拡大などの変化が確認される一方で、劇的なローマ式の農業が展開された痕跡は見られないと指摘する。また、Christensen は人類学的分析から *Civitas Batavorum* 全体の独自性を主張している⁸⁵⁾。彼は、農村部で多く発見された封印箱から、大量に徴兵されたバタウィ族が退役兵として帰還したために、*Civitas Batavorum* は農村部においても例外的にラテン語の識字率が高く、また現金経済も浸透⁸⁶⁾しており、ローマの普遍的な文化に容易にアクセスできる環境が整っていたとする。しかし、大規模な軍の駐留や徴兵など、ローマによるバタウィ社会の変革への反動として、バタウィ族は儀礼的な祝宴、バタウィ族を象徴する武器の捧げ物、意図的に古風な墳墓や副葬品を通じて共同体独自のアイデンティティをより強調する傾向が見られた。さらには、ローマ世界と密接な関係にも関わらず、限定的な都市化や牧畜経済の継続といった先史的な雰囲気も維持⁸⁷⁾されたようである。

すなわち、*Civitas Batavorum* の現地民は、軍への徴兵や家畜の取引などを通じてローマ的な世界への接点を確実に有していたものの、その世界への同化は実際的に必要なレベルに留まり、文化的な統合のないまま共同体の独自性を保っていたと考えられる⁸⁸⁾。こうした特徴は、軍に徴兵され、市民権を獲得し、ラテン語話者となった地元出身の退役兵が、故郷への親和性から「農村」を中心に定住していたことにより、ローマ的な思想や慣習の仲介者としての役割を担いつつ、ローマ軍と現地民の緩衝材として機能していた可能性を示唆するものである。

第2節 退役兵と軍の結びつき

Civitas Batavorum の独自性には、現地民と軍との間を取り持った退役兵の関与が疑われているが、退役兵はどれほど軍の影響を受けながら辺境地域に関わったのだろうか。

一般に、共和政期から元首政初期のローマ帝国は、退役兵を集団で入植させるなど、兵士の退役後の人生に主導的に関与でき、また、こうしたローマ軍および退役兵の存在は、属州の都市を基盤としたローマ帝国支配の伸長において重要な役割を担っていたと考えられている⁸⁹⁾。以下の『年代記』の一節⁹⁰⁾は、兵士が退役後にローマ帝国にまだ短期間しか属していない辺境地域に、インフラ整備や防衛のために住まわされたことへの不満が、14年のアウグストゥスの死後に起こったパンノニアの諸軍団の暴動の引き金だったと伝えている。

まったく幾年も無気力さゆえに過ちをしてきたものだ。30年も40年も軍役に服して年を取り、多くの者はぼろぼろに体に傷を負いながらも耐えてきた。解任されても軍務が終わるわけでは決してない。そればかりか、軍旗のもとに野営生活である。違う名前でも同様の労苦を耐えしのぶのである。たとえこれだけの不運を生き延びたとしても、な

おさら離れた地の果てに引きずられる。そこで、耕地という名で、ぬかるんだ湿地や山岳地帯の未耕作地を与えられる。

他にも『年代記』には軍による強制的な退役兵の植民がしばしば記録されている。50年、低地ゲルマニアのある地域にクラウディウスの皇后アグリッピナによって大規模な植民がなされた。

しかし、アグリッピナは、同盟諸部族にも力を見せつけようとし、彼女の生まれたウバイ族の首邑に、嘆願によって退役兵を植民者として送り込ませた。そして、自分自身の名前にちなんでその町を名付けた⁹¹⁾。

皇后の名を冠してアグリッピネンシスと呼ばれるこの植民市は今日のケルンに当たる。ゲルマニアの例ではないものの、『年代記』によれば、従来、東方属州では「軍団全体が、司令官や百人隊長、各階級の兵士とともに入植し、調和のために、そして愛情を持って共同体を作⁹²⁾」っており、退役兵の植民は、軍の組織をそのまま維持した駐屯軍の拡張的な側面を有していたようだ。また、『同時代史』でもバタウィ族の反乱の文脈でアグリッピネンシスは言及⁹³⁾されており、少なくともレトリック上⁹⁴⁾は、植民団として入植した者たちは20年ほどの月日を経て現地社会に確かに定着し、密接な関わりを持っていたと考えられる。

次の史料⁹⁵⁾も軍団と地域の懇意な関係を表している。以下の引用は、69年にシュリア（現在のシリア）総督ムキアヌスが、ゲルマニア軍団に皇帝として擁立されたウィテッリウスに対抗して、属州民にウェスパシアヌスへの忠誠を誓わせるために属州民を刺激しようとした発言である。

ムキアヌスが断言したことほどに、属州民と軍隊を騒ぎ立てたものはなかった。「ウィテッリウスはゲルマニアの軍団兵を、給料が高く、休息のとれる軍役に就かせるためにシュリアに移動させ、これに対してシュリアの軍団兵を気候も労働も厳しいゲルマニアの冬営に送り込むことに決めた」と。実際、属州民は軍団兵との慣れ親しんだ交友関係を喜んでおり、彼らの多くが兵士と絆と親密さで結ばれ、兵士も長年の軍役で慣れ親しんだ陣営をわが家のように大事に思っていたからである。

もちろん、兵士の立場からしても「気候も労働も厳しい」ゲルマニアでの任務に就くことは好ましくないだろうが、それ以上に人間関係の点から属州民もこのウィテッリウスの采配に憤慨していることが注目に値する。また、ウィテッリウス率いるゲルマニア軍団は評判が悪いこと⁹⁶⁾もシュリア属州民の怒りの一因であろう。現地の人々にとっても軍と有効な関係を築くことは重要であり、どの軍が駐屯し、どのような姿勢で地域に関与するかは関心の

的であったことがうかがえる。したがって、軍団は決して要塞内で完結せず、現地の人々との相互的な強い結びつきを持った存在だったのである。政策としての大規模な植民だけでなく、地域社会と懇意な関係を構築した軍団兵にとっても、退役後に駐屯していた地域に留まることは不自然ではなかった。低地ゲルマニアではコロニア・アグリッピネンシスの他にも、コロニア・ウルピア・トラリアナ（現在のドイツ、クサンテン）など植民市があり、Civitas Batavorum においても墓碑銘や除隊証明書などの痕跡から退役兵の動きは明らかにされている⁹⁷⁾。兵士は除隊の際に故郷に帰る選択もできたが、前節でも紹介したように、退役後に出身地域に帰らずに兵役を勤め終ったときの属州にとどまる者⁹⁸⁾や、ほかの地域へ入植させられた後でも駐屯した属州へと去っていく者⁹⁹⁾も多かった。

低地ゲルマニアにおける退役兵の存在を指摘するのは文字史料だけではない。近年の研究では馬牧場の遺跡でローマ式の武具が発見されたことから、退役兵がローマの大型家畜との交配を担うなどして、畜産に関わっていたと推測¹⁰⁰⁾されている。また、180-230年のものとされる、駐屯地近くの農場の遺跡からも軍のレンガ材の転用が確認されていることから、駐屯地に農業生産物を包括的かつ迅速に供給するために、退役兵が現地社会の農業生産の拡大を管理したと主張する研究者¹⁰¹⁾もいる。低地ゲルマニアでは、大規模な植民政策のあった地域だけではなく、軍が駐屯する地域では退役兵が地域社会の構成員として取り込まれ、そして彼らが現地の畜産の発展に貢献していたことが想像できよう。また、Civitas Batavorum では、地元出身のバタウィ族の兵士が軍で使用していた武器などの装備品を退役後にあえて払い戻さずに、その後も手元に置いていた事例が多数確認されている。Nicolay¹⁰²⁾はそれらが退役兵によって「社会的利用」の目的、退役とともに市民権を獲得した特権的な存在であるという地位を物理的に示すために用いられたと考えている。すなわち、軍との関わりを有していること、そしてそれによって得た地位の象徴として軍事品は利用されていたのであり、退役兵にとって軍との関わりは退役後の社会生活に重要だったことがうかがえる。他にも、退役兵が植民活動や駐屯の延長として軍団との関係を維持していただけではなく、軍からの指示で軍団の活動に協力するために呼び戻される事例も確認されている¹⁰³⁾。

以上のことから、一般に退役兵は退役後も軍の強い影響下にいたことは明らかである。Civitas Batavorum では地元出身の兵士の帰還やこの地域に派遣されていた兵士が退役兵として定住した形が主流であるため、植民という形での強制的な退役兵の動員は限定的である。ただ、他地域と同様に、彼らも単なる軍役を終えた一般人ではなく、軍の影響下にある元「兵士」としての役割を担い続けており、それが退役兵自身にとっても重要な属性であったと考えられる。

第3節 退役兵の畜産への関与

辺境地域の畜産はこれまで示してきたように軍との連動で変容してきた。その中でも大きな変化は、小型であった現地の家畜がローマ軍進出以降にローマ風に大型化したことと、専

門的な食肉加工技術や肉包丁などのローマ式新技術が導入されたことである¹⁰⁴⁾。こうした直接的なローマ的な技術の広まりの担い手として退役兵の関与は外せない。なぜなら、兵士には市民よりも農民が好まれる傾向があったことや¹⁰⁵⁾、軍務の一環として軍や駐屯地の近くで農畜産業に従事することがあったこと¹⁰⁶⁾、部門によって体力以外に文字を書く能力や計算する能力が必要¹⁰⁷⁾とされたように、軍での教育を通じて知識を身に付ける機会があったことから、十分な農畜産業の知識を有していたと考えられるからである。

それでは、そうした知識を持っていた退役兵が、辺境地域の現地社会における畜産やその軍への供給に関与する動機は一体何だったのかを最後に検討することとする。

まず、一つ目に想定されるのは前節で紹介した、退役兵の意思によらず、軍による植民および開拓の労働力としての動員が動機となる事例である。1世紀までに退役兵が軍の政策によって派遣された地域で、軍役で身につけた様々な技術を生かして商業や農業分野においてローマ化の推進力として機能した¹⁰⁸⁾ことが確認されている。前節で紹介した『年代記』1章17節の退役兵は、未開の地域に送り込まれたことに不平を述べており、北西の辺境地域はまさにこの一節で描かれているような防衛を要する湿地帯である。現地の粗放的な畜産の生産力を向上させることは、ローマ駐屯軍の大きな需要に対応する上で極めて重要であり、ローマ軍がその促進剤としてローマ技術に精通した人物である退役兵を動員した可能性が考えられる。

2つ目は、退役兵自身の選択による实际的な動機である。すなわち、20年ないし25年の長きに渡る軍役の労いとして与えられる *missio honesta* と呼ばれる土地や金銭¹⁰⁹⁾を資金源に自己投資として土地を購入することによって、あるいは親から受け継いだ土地において、軍で身につけた知識を生かすことができる仕事として農畜産業を選ぶというものである。Stollによると¹¹⁰⁾、帝国東方で発見された墓碑銘 (*SEG 43, 1993, no. 911*) には、除隊後に帰郷したある人物が父から受け継いだ土地で奴隷に適切な農業方法での耕作を命じ、豊富な収穫物を得たと記録されており、退役兵が軍で学んだ技術を主体的に現地民に伝えた可能性は十分に想定できる。

3つ目は、推測に基づく提言だが、退役後に市民権を付与され、現地民から区別される「エリート」となった彼らの、農業に対する「エリート」意識を動機とするものである。Sallerのプリニウス理解¹¹¹⁾によると、ストア派に由来する倫理的価値観から、ローマ人にとって自然の過度な改変や搾取は自然に対する暴力であり、ありのままの自然を生かした、節度を持った利益の追求が好まれた。そのため、農業で得た生産物がエリートの適切な富の源と理解され、特に、継続的な金銭の投資を必要とする畜産はエリートの社会的地位を可視的に表明するものであった¹¹²⁾。先ほども紹介した、辺境地域の農村では発見される軍の装備品は、退役兵が自らの軍への属性と一般の現地民とは異なる社会的地位やローマ市民権という特権を示そうとした痕跡だとされている。そのような素朴な退役兵とストア派的な「エリート」の価値観の結びつきを実証することはできないが、軍役を通じてローマ文化に接した退

役兵が辺境世界において自らを特権的な存在であったことを強調する傾向があったことは、畜産への関与という文脈においても注目に値するだろう。

これまで考察してきたように、辺境地域での家畜供給には退役兵の関与が強く疑われている。軍にとって欠かせない辺境地域の資源の活用の際し、退役兵が現地の畜産への関与や投資を通じてローマ軍への家畜供給に貢献することは、古代人の倫理観に合致する行為であり、彼らは長期の軍役を通じてこの分野に関わるだけの十分な知識と動機を有していた。いずれの動機で畜産に関わることになったとしても、20年から25年もの長期の軍役の後に、民間人となった退役兵が農家として一から生計を立てていく上で、軍との結びつきを利用して軍への家畜供給に関わることは、大きなメリットのある選択となっただろう。このように、北西の辺境において、軍団が駐屯する現地社会の家畜生産やその供給の促進には、農畜産に関する知識を十分に持つ退役兵が関与しており、現地社会の構成員として現地民と密接な関係を構築しつつも、ローマ軍の齒車として駐屯地への安定的な家畜供給を支援していたと考えられるのである。

おわりに

タキトゥスとウィンドラング木板文書、動物考古資料を総合的に分析した結果、北西の辺境地域における家畜供給は、穀物供給と比べ、帝国官僚の介在による帝国中枢からの統一的な方針が示されず、駐屯地ごとや軍団ごとなどの小規模で実施され、個人の兵士が管理を担ったことを示唆している。このことが決して家畜供給の重要性の低さによるものではないことは、家畜供給と穀物供給が並行して行われていた事例からも明らかである。現地から調達可能な資源は駐屯地を中心に、遠くからの輸送が必要なものはより大きな組織を中心に担当するなど、実務的な観点からそれぞれの供給の扱いが異なっていたのである。また、軍からの家畜や皮革の徴発は強制力があり、現地民は従わざるを得なかったが、現地の生産力を考慮した負担であったことや現地民もある程度主体的に関与できたことから、必ずしも特定の家畜の生産を強いられ、暴力的に搾取されたとは限らない。むしろ日常的な家畜供給では、軍の需要と現地社会の生産力のバランスの中で徴発が課されていたと考えられる。軍で様々な知識を身につけた退役兵が供給の推進や畜産の発展に指導的な役割で関与したことで、一部の現地民は生産力の向上と余剰を用いた市場取引を通じた利益の獲得という恩恵に与ることもできた。特に *Civitas Batavorum* の事例からは、地元出身の退役兵が軍と現地民の間の仲介者としての役割を担い、共同体の独自性の維持に貢献していたこともうかがえる。

このように、軍への家畜供給を通じて見るフロンティア世界は、Luttwak 批判の研究者が主張してきたように、1つの帝国中枢からの大戦略に位置づけられるものではないことは明らかである。国境地帯に駐屯するローマ軍は、帝国外の蛮族からの防衛や監視という目的を

遂行するために軍事物資を確実に調達する必要がある、彼らの関心はあくまで必要量の確保に向けられた。それはすなわち、地域社会を必要以上にローマ的なものに変革するものではなく、軍との関連が深く、地元との結びつきも強い退役兵を軸としながら漸次的に駐屯地域周辺からの供給量を増やし、自力での運営を可能にする供給網の形成という方針につながった。こうした供給への関与は、軍で長期の軍役を務めた兵士にとっても、退役後の生計を立てる上で好都合であったと言える。ローマ人がこうした方略にどれほど自覚的であったかは不確かだが、戦略的な弱点となりうる不安定な長距離輸送への依存からの脱却や、蛮族の現地民への過度な負担から生じる反乱の危険性を踏まえると、常に情勢の安定しない北西辺境地域と親和性の高い方略だったのだろう。したがって、ローマ帝国のフロンティア世界は、ローマ軍による抑圧的な支配と現地民の従属という一方向の図式では片づけることのできない、駐屯軍と現地地域社会が需要と供給という実際上の必要性で結びついた世界だったのである。

北西辺境地域は文献資料、考古資料の不足のために研究が非常に難しく、本稿も、状況証拠を結び付ける形でしか検討できていないという課題を抱えている。今後、さらなる発掘調査の進展と、史料のより多く残る辺境地域と結びつけた研究を通じて、需要と供給の文脈で包括的なフロンティア像を形成していくことが期待される。

註

- ・註で言及する文献については、初出時に詳細な書誌情報を記し、2度目以降は、著者名及び頁のみ（同一著者の引用に限り、2度目以降も出版年を併記）記載している。
- ・史料名等の略称は、Hornblower, S., and Spawforth, A., (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012 に準ずる。
- 1) Whittaker, C.R., *Rome and its Frontiers: The Dynamics of Empire*, London/ New York, 2004, 181-193. 西欧諸国の同時代的な関心とローマフロンティアの歴史認識の相互関係について詳述。
- 2) Luttwak, E., *The Grand Strategy of the Roman Empire from the First Century A.D. to the Third*, Baltimore and London, 1976. また、本稿では先行研究の著者名を、邦語で文献を参照したものはカタカナで、欧語で参照したものはアルファベットで表記している。
- 3) Kehne, P., "War-and Peacetime Logistics: Supplying Imperial Armies in East and West", in Erdkamp, P., (ed.), *A Companion to the Roman Army*, Oxford, 2007, 323-338, esp. 323-324; Whittaker, *op. cit.*, 88.
- 4) この引用は原文のラテン語 (Vegetius, R., *Epitoma rei militaris/ Vegetius*, ed. by Reeve, M.D., Oxford/ New York, 2004) をもとにした拙訳である。また訳出に際し、Milner, N.P., (trans.), *Vegetius: Epitome of Military Science: Translated with Notes and Introduction*. (*Translated Texts for Historians*, 16), Liverpool, 1993 の英訳も参照した。
- 5) Roth, J.P., *The Logistics of the Roman Army at War: 264 b.c.-a.d. 235*, Leiden /Boston /Köln, 1999, 154-166.
- 6) Drummond, S.K., and Nelson, L.H., *The Western Frontiers of Imperial Rome*, New York, 1994, 77-89.
- 7) Grau-Sologestoa, I., et al., "Innovation and Intensification: The Use of Cattle in the Roman Rhine Region", *Environmental Archaeology: The Journal of Human Palaeoecology*, 2022/06, 1-19, esp. 1.
- 8) 獣骨の大型化を指摘する代表的な研究として Lauwerier, R.C.G.M., *Animals in Roman Times in the Dutch Eastern River Area*, Amersfoort, 1988; King, A., "Animals and the Roman Army: Evidence of Animal Bones", in Goldsworthy, A., and Haynes, I., (eds.), *The Roman Army as a Community*, London,

- 1999, 139-149; Groot, M., "Developments in Animal Husbandry and Food Supply in Roman Germania Inferior", *European Journal of Archaeology*, 20/3, 2017, 451-471; Valenzuela-Lamas, S., and Albarella, U., "Animal Husbandry across the Western Roman Empire: Changes and Continuities", *European Journal of Archaeology*, 20/3, 2017, 402-415 が挙げられる。
- 9) Stallibrass, S., and Thomas, R., (eds). *Feeding the Roman Army: The Archeology of Production and Supply in NW Europe*, Oxford, 2008, 4 より。この著作ではブリテン島とゲルマニアが北西属州 North-western provinces として 1 つにまとめて検討されている。
- 10) 本稿で引用されるタキトゥスの史料はいずれも原文のラテン語をもとにした拙訳である。底本とした原文および翻訳書は以下の通りである。ラテン語原文: Tacitus, C., *Annales ab excessu divi Augusti*, ed. by Fisher, C.D., Oxford, 1906; Tacitus, C., *Historiae*, ed. by Fisher, C.D., Oxford, 1911. 邦訳: タキトゥス (国原吉之助訳) 『年代記 (上・下)』岩波書店、1981; タキトゥス (国原吉之助訳) 『同時代史』筑摩書房、2012。英訳: Tacitus C., *The Complete Works of Tacitus*, trans. by Church, A.J., Brodribb, W.J., and Hadas M., New York, 1942。
- 11) ウィンドラングの木板文書およびその和訳はいずれも、以下のオンラインデータベースを参照している。Scott Vanderbilt (2023), "Vindolanda Tablets – Home", *Roman Inscriptions of Britain* <https://romaninscriptionsofbritain.org/tabvindol> (参照 2023/01/04)
- 12) 野間三郎『『中心と周辺』—RATZEL における空間分化の研究とその発展—』『地学雑誌』84/2、1975、74。
- 13) センプル、E.C. (金崎肇訳)『環境と人間—ラッツェルの人類地理学の体系に基づく—』古今書院、1979。
- 14) フェーヴル、L. (田辺裕訳)『大地と人類の進化—歴史への地理学的序論—』下巻、岩波書店、1972、177-205。
- 15) Luttwak, *op. cit.*
- 16) Isaac, B., *The Limits of Empire: The Roman Army in the East*, Oxford, 1990, 372-418 より。Whittaker, *op. cit.*, 28-49 も、1 つの章を Luttwak の大戦略の批判に充てている。
- 17) 柴野浩樹「書評 C・R・ホイッタカー『ローマ帝国のフロンティア』」『史苑』56-2、1996、87-100; 同「書評 C.R. Whittaker, *Rome and its Frontiers: The Dynamics of Empire*」『西洋古典学研究』53、2005、151-155。
- 18) Lattimore, O., *Inner Asian Frontiers of China*, New York, 1940。
- 19) Whittaker, *op. cit.* は、1995 年に開催された考古学会 International Congress of Roman Frontier Studies の第 16 回大会で発表された研究報告に多くの影響を受けてまとめられた。
- 20) Whittaker, *op. cit.*, 88-114。
- 21) Breeze, D.J., "Demand and Supply on the Northern Frontier", in Breeze, D.J., and Dobson, B., (eds.), *Roman Officers and Frontiers*, Stuttgart, 1993, 526-552。
- 22) Erdkamp, P., "The Corn Supply of the Roman Armies during the Principate (27BC-235AD)", in Erdkamp, P., (ed.), *The Roman Army and the Economy*, Amsterdam, 2002, 47-69。
- 23) Rodriguez, J.R., "Baetica and Germania: Notes on the Concept of Provincial Interdependence in the Roman Empire", in Erdkamp, P., (ed.), *The Roman Army and the Economy*, Amsterdam, 2002, 293-308。
- 24) Lauwerier, *op. cit.*, 166-176。
- 25) Bökönyi, S., "Animal Breeding on the Danube", in Whittaker, C.R., (ed.), *Pastoral Economies in Classical Antiquity*, Cambridge, 1988, 171-176。
- 26) King, *op. cit.*, 139-49。
- 27) 池口守「古代イタリアにおける肉食の実態と変容—牛肉の生産と消費を中心に—」桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム—空間・ネットワーク・文化の交錯—』山川出版社、2010、136-153。一般にローマ人は豚を好む傾向があるとされるが、池口はローマの食習慣における牛の重要性を再評価しており、ローマの食習慣と辺境地域での一時的な豚の増加を安易に関連付けることには注意が必要である。また、近年では、軍の駐屯に伴う豚の増加という現象に関して、食糧供給における軍の戦略的な側面を強調する研究が多くみられる。詳細は註 62 を参照。

- 28) Kooistra, L.I., “The Provisioning of the Roman Army in the Rhine Delta between c. AD 40 and 140”, in Morillo, Á., and Hanel, N., and Martín, E., (eds.), *Limes XX: XX Congreso Internacional de Estudios sobre la Frontera Romana: XXth International Congress of Roman Frontier Studies: León (España)*, Septiembre, 2006, Madrid, 2009, 115-122; Kooistra, L.I., et al., “Could the Local Population of the Lower Rhine Delta Supply the Roman Army? Part 1: The Archaeological and Historical Framework”, *Journal of Archeology in the Low Countries*, 4, 2013, 5-23.
- 29) 家畜供給に関する文献資料の不在を指摘する研究については註 46 を参照。
- 30) Groot, M., *Livestock for Sale: Animal Husbandry in a Roman Frontier Zone*, Amsterdam, 2016.
- 31) Casson, L., “The Role of the State in Rome’s Grain Trade”, *Memoirs of the American Academy in Rome*, 36, 1980, 21-33.
- 32) 宮崎麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治—共和政から帝政へ—』九州大学出版会、2011、47-50。
- 33) ガーンジィ、P. (松本宣郎・阪本浩訳)『古代ギリシア・ローマの飢饉と食糧供給』白水社、1998、349-353。
- 34) 宮崎麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治—共和政から帝政へ—』九州大学出版会、2011、47-65。
- 35) Tac. *Ann.* 2.59; Tac. *Ann.* 15.39; Tac. *Hist.* 4.52.
- 36) Tac. *Ann.* 2.87; Tac. *Ann.* 6.13; Tac. *Ann.* 15.18.
- 37) Tac. *Ann.* 3.54.
- 38) Tac. *Hist.* 4.38.
- 39) Tac. *Ann.* 11.4.
- 40) Tac. *Ann.* 2.6.
- 41) Tac. *Hist.* 5.23.
- 42) Tac. *Hist.* 4.58.
- 43) Tac. *Hist.* 4.60.
- 44) Tac. *Hist.* 3.8.
- 45) Cavallo, C., et al., “Food Supply to the Roman Army in the Rhine Delta in the First Century A.D.”, in Stallibrass, S., and Thomas, R., (eds.), *Feeding the Roman Army: The Archeology of Production and Supply in NW Europe*, Oxford, 2008, 69-81; Erdkamp, op. cit., 67.
- 46) このような傾向は以下の研究で指摘されている。Davies, R.W., “The Supply of Animals to the Roman Army and the Remount System”, *Latomus*, 28/2, 1969, 429-459; King, op. cit., 148; Kehne, op. cit., 329; Roth, op. cit., 166. 特に、Davies は家畜に関する文献資料の欠如を指摘し、現存史料から軍団に新しい騎馬が補充される仕組みを研究した。新しい馬の調達の際には、総督に人員の名前や理由を挙げながら許可を得る必要があり、軍団への動物の供給における帝国官僚の関与を明らかにした。しかし、騎馬はローマの基準での訓練を受ける必要性のある特殊な家畜であることに注意する必要がある。そのため、本稿では、肉や労働力、皮革としての役割を持つ「家畜」に注目して検討し、特殊な位置づけである騎馬に関しては取り上げない。また、Davies も新馬の補充に関する長距離輸送の記録の不在のために、駐屯地域周辺から調達された馬がローマ軍の下で訓練を受けたと推測している。このことも、軍への家畜の調達が駐屯地や軍団などより小規模で管理された可能性を支持する。
- 47) Tac. *Ann.* 4.72.
- 48) ドゥルススの兄は皇帝ティベリウスであり、タキトゥスがドゥルススに肩入れしてオレンニウスについて批判的に記述している可能性がある。
- 49) 首位百人隊長 *primus pilus* は兵卒の軍団兵の最高位であり、1 年の任期の後に騎士身分を獲得した。Hornblower, S., and Spawforth, A., (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012 より。
- 50) *Tab. Vindol.* 343. 原文ラテン語および英訳を参考に作成した拙訳。[] は訳者による補充。見やすさのために改行をほどこした。
- 51) 100 ポンドはおおよそ 32.6 キログラム。
- 52) 5000 モディウスはおおよそ 32750 キログラム。河島思朗 (2022)「古代ローマの貨幣と物の値段」

Via della Gatta https://www.vdgatta.com/note_coin.html (参照 2023/01/04)

- 53) 註 52 のサイトより、500 デナリウスは現代の貨幣価値でおおよそ 64 万円に換算される。
- 54) *Tab. Vindol.* 581 は 97 年から 105 年のものと推定される断片的な木板文書であり、112 行に渡って日付ごとに駐屯地内で消費や必要とされた食材を列挙している。その 22 行目には *ueterano pull* すなわち「退役兵、ニワトリ」と記載されており、退役兵によってニワトリが供給されたことの記録として理解されている。同時期の木板文書とされる、*Tab. Vindol.* 593 も断片的なもので、魚や鳥の罾についての記録である。‘*laquios vii penes Veteranum*’ の箇所は「7 つの罾、退役兵の管理下に」と読み取れることから、退役兵が様々な動物の捕獲に関わっていた可能性が指摘できる。
- 55) Casson, op. cit., 29 より、2 世紀末と限定されているのは、皇帝セプティミウス・セウェルス（在位 193–211）が軍人の穀物や食糧などの必需品の配給を実現するために現物税 *annona militaris* を課し、食糧調達の制度が変化したためである。Erdkamp は 2 世紀から 3 世紀にかけて、穀物供給の実態が大きく変容したのではなく、現物税を課す前から似たような強制的な徴発や買い上げが一般的であり、2 世紀末に制度として整備されたと考える。（Erdkamp, op. cit., 47-50.）このことも、市場の取引が補助的で、主要な軍事物資の調達は日常的な徴発によって成り立っていたと考えられる根拠の一つである。
- 56) *Tab. Vindol.* 191 は様々な種類の肉が列挙された木板文書で 97–105 年のものと推定される。この木板文書も断片的で、ノロジカの肉や子豚の肉など具体的な食材が記載されている箇所だけ残されている。20 デナリウスとの記録から様々な肉が市場で取引され、兵士個人も購入可能だった可能性を示すものである。
- 57) Brunt, P.A., “Tacitus on the Batavian Revolt”, *Latomus*, 19/ 3, 1960, 494-517, esp. 499.
- 58) Tac. *Hist.* 4.14.
- 59) 「徴兵担当の者」という表現は、原文では従者や補佐などを意味する *minister* が用いられている。個人の兵士が徴募の管理を担い、個人の裁量を反映することができたことを示唆している。現地の（人的）資源に頼っているバタウィ族の徴兵は、家畜供給と同様に、軍団の兵士個人に管理が任されていた様子がうかがえる。
- 60) Groot, M., “Surplus Production of Animal Products for the Roman Army”, in Stallibrass, S., and Thomas, R., (eds.), *Feeding the Roman Army: The Archeology of Production and Supply in NW Europe*, Oxford, 2008, 83-98, esp. 84.
- 61) Cavallo et al., op. cit., 69-77. 時代区分はこの研究に従う。
- 62) 軍団の駐屯に伴う豚の割合の急上昇とその後の減少傾向は、今日まで多くの考古学者の議論的である。かつては、King (King, op. cit., 139-149) のように、ローマ化の文脈の中でローマ風の食習慣の影響が主張された。しかし、近年では Cavallo のように、軍の駐屯初期の急激な食糧需要への対応として、ローマ軍が駐屯に合わせて家畜を長距離輸送したとする見解が一般的である。Thomas は、この現象が北西の辺境の各地で見られることから、供給網形成までの間に粗放的な現地の畜産への負担軽減のための一時的な措置として、軍が明確な意図をもって現地の畜産に関わった根拠としている。Thomas, R., “Supply-Chain Networks and the Roman Invasion of Britain”, in Stallibrass, S., and Thomas, R., (eds.), *Feeding the Roman Army: The Archeology of Production and Supply in NW Europe*, Oxford, 2008, 31-52, esp. 45-46.
- 63) Cavallo らは同研究で穀物や他の植物にも注目しており、①および②の段階では穀物や他の地中海産作物は要塞内を除いてほとんど見られないことを明らかにした。すなわち、穀物などの供給は畜産に比べて地元の人々とローマ軍のやり取りが始まるのが遅く、②の段階まではその多くが他の属州（ガリアやヒスパニアなど）から長距離で輸送されたと考えられる。ガリアからゲルマニアに食糧が補給されていたことは前 15 年のゲルマニア戦役の史料（Tac. *Ann.* 1.71）でも確認できる。
- 64) 本稿では現地民という単語を用いる際、ローマ市民権を持たず、この地域にローマ軍が進出する前から住んでいたバタウィ族などゲルマン系諸部族の人々を指す。
- 65) Tac. *Hist.* 4.12. ローマ軍に徴兵されたバタウィ族は補助軍の兵士として軍役を務めた。彼らの指揮官には、従来の支配構造のままにバタウィ族の有力者や貴族が就任した。このことはバタウィ族の反乱が指導力を持って大規模に行われた原因の 1 つでもあった。

- 66) Groot, *op. cit.*, 2008, 91.
- 67) Kehne, *op. cit.*, 333.
- 68) Tac. *Ann.* 4.6.; Tac. *Ann.* 4.72. 「我々ローマの大きな食欲さ」 こうしたタキトゥスの記述は、ローマ人エリートも属州民に税負担に対して一定程度理解があったことのあらわれであり、ローマが必ずしも過酷な徴発を課していたわけではないという考えを補強する。
- 69) Kolbeck, B., “A Foot in Both Camps: The Civilian Suppliers of the Army in Roman Britain”, *Theoretical Roman Archaeology Journal*, 1 (1)/8, 2018, 1-19, esp. 3-4.
- 70) Campbell, B., *The Roman Army, 31 BC–AD 337: A Sourcebook*, London/New York, 1994, 140-143.
- 71) *Tab. Vindol.* 191; *Tab. Vindol.* 181; *Tab. Vindol.* 213. *Tab. Vindol.* 191 は註 56 を参照。
104-20 年の木板文書である *Tab. Vindol.* 181 は、様々な人々の支払いや未払いの金額の記録であり、92-97 年のものと推定される *Tab. Vindol.* 213 は断片的な書簡である。前者の「購入した木材、7 デナリウス」 *lignis emtis (daroos) vii*、後者の「あなたから大麦を購入できるように」 *ut hordeum commercium habeant a te* との記述は、ウィンドランダで金銭が必需品の調達に頻繁に使われていたことを示すものである。日本語訳はいずれも拙訳。
- 72) Thomas, *op. cit.*, 45-46; Groot, *op. cit.*, 2016, 221-225.
- 73) Groot, *op. cit.*, 2016 は研究対象とする北西辺境地域を生産地域と消費地域に分類して検討している。詳細は第 3 章第 1 節を参照。
- 74) *Ibid.*, 191-220.
- 75) Tac. *Hist.* 5.19.
- 76) Van Eckevort, H., et al., “Nijmegen, from Oppidum Batavorum to Ulpia Noviomagus, Civitas of the Batavi: Two Successive Civitas-Capitals”, *Gallia*, 72-1, 2015, 285-298, esp. 287; Van Eckevort, H., “Cauldrons and Feasting in Oppidum Batavorum on the Eve of the Batavian Revolt”, in Iveleva, T., et al., (eds.), *Embracing the Provinces: Society and Material Culture of the Roman Frontier Regions*, Oxford, 2018, 133-140, esp. 133-134.
- 77) Hoss, S., “Military versus Civilian and Legionary versus Auxiliary: The Case of Germania Inferior”, in Hodgson N., et al., (eds.), *Roman Frontier Studies 2009: Proceedings of the XXI International Congress of Roman Frontier Studies (Limes Congress) Held at Newcastle upon Tyne in August 2009*, Oxford, 2017, 236-240, esp. 236.
- 78) Driessen, M., “Nice Meating: The *canabae legionis* Livestock Market at Nijmegen Revisited”, in Iveleva, T., et al., (eds.), *Embracing the Provinces: Society and Material Culture of the Roman Frontier Regions*, Oxford, 2018, 121-132, esp. 129-130.
- 79) Christensen, K., “The Universal and the Local in the Civitas Batavorum”, *Journal of Ancient History*, 11 (1), 2023, 130-148, esp. 136.
- 80) Derks, T., and Roymans, N., “Returning Auxiliary Veterans: Some Methodological Considerations”, *Journal of Roman Archaeology*, 19, 2006, 121-135, esp. 124.
- 81) Christensen, *op. cit.*, 134; Derks and Roymans, *op. cit.*, 123. バタウィ族は補助軍の 8 つの歩兵大隊と 1 つの騎兵部隊を構成した。その負担は 1 世帯につき 1、2 人が従軍していたほどである。
- 82) Derks and Roymans, *op. cit.*, 124.
- 83) Nicolay, J., *Armed Batavians: Use and Significance of Weaponry and Horse Gear from Non-military Contexts in the Rhine Delta (50 BC to AD 450)*, Amsterdam, 2007, 162-164.
- 84) Groot, *op. cit.*, 2016, 191-220.
- 85) Christensen, *op. cit.*, 133-145.
- 86) *Ibid.*, 137. Civitas Batavorum には貨幣が他地域と比べ急速に浸透しており、その背景は徴兵のために女性を主体とした小規模な市場取引が普及していたと指摘する。
- 87) Derks and Roymans, *op. cit.*, 132-133.
- 88) 柴野浩樹「ローマ元首政期における退役兵と都市社会—北アフリカの事例から—」『西洋史研究』新輯 27、1998、61。軍を帝国全体の社会構造における立ち位置から考察したアルフェルディは、元首政期におけるローマ軍の人的流動性が駐屯地周辺に集約していくという傾向から、ローマ軍およ

びその駐屯地域がローマの社会構造から逸脱した「軍隊社会」を形成したと説明する。Civitas Batavorum のローカル性は、膨大な徴兵の対象であったバタウィ族の特殊性に依拠するが、この「軍隊社会」との関連から帝国辺境部のその他の都市形成とも比較検討していく必要がある。

- 89) 同論文、60.
- 90) Tac. *Ann.* 1.17.
- 91) Tac. *Ann.* 12.27.
- 92) Tac. *Ann.* 14.27.
- 93) Tac. *Hist.* 4.65.
- 94) バタウィ族の反乱の際にローマ植民市アグリッピネンシスは、反乱軍による略奪の危機を免れたが、その裕福さと繁栄ゆえに、ゲルマン部族によって都市が破壊され、ローマ市民の住民全員が殺害される危険性があった。この一節では、退役兵の入植者が地域社会に取り込まれた「兄弟」であることを理由に、ローマ人の身の安全を担保しようとしている。同様に Tac. *Ann.* 11.24 では、入植によって地域社会が統合されたことを理由に軍への徴集が実施されている。
- 95) Tac. *Hist.* 2.80.
- 96) ウィテリウス率いるゲルマニア軍団の気性の荒さは『同時代史』の記述にも散見する。Tac. *Hist.* 2.67; Tac. *Hist.* 2.73; Tac. *Hist.* 2.74; Tac. *Hist.* 2.76.
- 97) Derks and Roymans, *op. cit.*, 121; Nicolay, *op. cit.*, 161.
- 98) 辺境地域で軍役に就いていた兵士のうちおよそ 70% が帰郷せずに駐屯地域周辺に残ったとされる。Iveleva, T., "In Search of Veterans of the Roman Army on the Frontier: Material Culture Evidence", in Vagalinski, L., and Sharankov, N., (eds.), *LIMES XXII: Proceedings of the 22nd International Congress of Roman Frontier Studies, Ruse, Bulgaria, September 2012*, Sofia, 2015, 437-445, esp. 437.
- 99) Tac. *Ann.* 14.27.
- 100) Groot, *op. cit.*, 2016, 217-222.; Groot, *op. cit.*, 2017, 464.
- 101) Stoll, O., *Römisches Heer und Gesellschaft: Gesammelte Beiträge, 1991-1999*, Stuttgart, 2001, 467-482 und 488-491.
- 102) Nicolay, *op. cit.*, 175.
- 103) クーロン、G・ゴルヴァン、J. (大清水裕訳)『古代ローマ軍の土木技術—街道・水道・運河などの建設事業をイラストで再現—』マール社、2022、46-48。ローマ軍がアルジェリアのサルダエの水道建設に際し、その計画初期に参加していた軍の水準測量技師を退役後に軍に呼び戻して建設に協力させたおかげで、計画を無事に実行に移すことができた事例を取り上げている。
- 104) Groot, *op. cit.*, 2017, 460-464.
- 105) Veg. *Epit.* 1.3.; Tac. *Ann.* 3.46.「戦争経験もない町民は目も耳もちゃんとついていない」
- 106) Tac. *Ann.* 13.55; *Tab. Vindol.* 180 は 104-120 年の木板文書で駐屯地内での食料配分の記録と考えられている。大部分は欠落しているが、どの量の穀物を誰に割り当てるかが 30 行に渡って記載されている。人名の修飾語として「豚を担当するルッコ」や「牛を担当する父」などの記述が見られ、駐屯地の内部に牛や豚の管理を任された人物がおり、彼らにも穀物分配がなされていたことが分かる。
- 107) Veg. *Epit.* 2.19.
- 108) Wesch-Klein, G., "Recruits and Veterans", in Erdkamp, P., (ed.), *A Companion to the Roman Army*, Oxford, 2007, 435-450, esp. 447.
- 109) Nicolay, *op. cit.*, 160.
- 110) Stoll, *op. cit.*, 479-480.
- 111) Saller, R.P., *Pliny's Roman Economy: Natural History, Innovation, and Growth*, Princeton/ Oxford, 2022, 48-59.
- 112) Howe, T., "Value Economics: Animals Wealth, and the Market" in Campbell, G.L., (ed.), *The Oxford Handbook of Animals in Classical Thought and Life*, Oxford/New York, 2014, 136-155, esp. 151.

資料：北西辺境地域の要塞で発見された獣骨に占める動物割合の変遷

時代区分	場所	牛	羊/ヤギ	豚	合計	豚の割合
時代区分1: 40年以前						
前19-前16年から前12年	Nijmegen:Hunerberg a	197	48	380	625	61%
前19-前16年から前12年	Nijmegen:Hunerberg b	60	18	96	174	55%
後20年-250年	Meinerswijk	89	8	22	119	18%
前10年-25年	Nijmegen la Trajanusplein	192	20	58	270	21%
15年-30年	Velsen I 82	4228	1398	1538	7164	21%
時代区分2: 40年から70年						
Woerden I,II, III: 40年-70年	Woerden	275	38	58	371	16%
時期1: 41/42年-69/70年	Alphen a/d Rijn 2001-2002	93	20	12	125	10%
41/42年-69/70年	Alphen a/d Rijn put 29	228	39	126	393	32%
werkput VI: 39年-47年	Valkenburg 80	58	7	39	104	37%
時期1: 42年-45年	Valkenburg 62	81	10	33	124	27%
時期2: 45年-47年	Valkenburg 62	150	27	55	232	24%
時期3: 47年-69年	Valkenburg 62	156		34	190	18%
時代区分3: 70年から140年						
時期2: 70年以降の木製の要塞	Alphen a/d Rijn 2001-2002	14	2	3	19	16%
80年-175年	Zwammerdam 1970-1974	443	36	48	527	9%

出典：Cavallo, C., et al., “Food Supply to the Roman Army in the Rhine Delta in the First Century A.D.”, in Stallibrass, S., and Thomas, R., (eds.), *Feeding the Roman Army: The Archeology of Production and Supply in NW Europe*, Oxford, 2008, 73.

Provision Policies of the Roman Army in the Northwestern Frontier Zone:

Analysing the Reality of Livestock Production and Supply

Noe TANAKA

The frontier zone of the Roman Empire has been an area of great interest and heated debate since the 19th century. In previous studies, discussion has focused on determining whether or not there was a unified strategy on an imperial scale. With its aim to explore the actual circumstances in this area, this paper focuses on the provisioning policies of the Roman army stationed in the northwestern border region in the 1st century AD. Among the various goods that have been found in the Roman fortresses in the region, attention is given to the supply and production of livestock, which presumably had significant demand in the military due to its multiple uses for food, labour, and leather products, and which also leaves physical traces in the form of bone remains to this day.

Through a comprehensive analysis of Tacitus's *Historiae* and *Annales*, Vindolanda tablets and zooarchaeological evidence, the characteristics of livestock supply in the northwestern border region become obvious. Unlike grain supply, which is frequently mentioned in ancient primary sources, livestock lacked a unified strategy from the imperial centre, and was instead managed on a smaller scale, such as by individual garrisons or legions. In place of the involvement of imperial bureaucrats, the key element of military livestock supply and production is the presence of veterans, who chose to settle in the region after completing their military service.

By depicting the world of veterans through a case study of Civitas Batavorum, where the Batavian Revolt of 69-70 AD occurred, various roles of veterans come to light. They not only contributed to the development of the supply-chain and the production of livestock, but they also acted as intermediaries between the military and local people, which played an important part in the preservation of the identity of those local people. As a conclusion, this paper presents the frontier as a world interconnected by the practical necessities of both the stationed army and the local community.